

芸大通信

2020年度・復刊第一号
Vol.001

京都市立芸術大学広報誌

KCUA WBS

CONTENTS

学長挨拶・文化力の源泉

学部紹介・音楽学部の歴史と教育

卒業生寄稿・阪 哲朗

学部紹介・「脳のリセット」～芸術学部と総合基礎実技」授業～

共同研究・「宇宙への芸術的アプローチ」
(AAS=Artistic Approaches to Space研究グループ)

国際交流・日伊世界遺産研究会

文化力の源泉



『芸大通信』の復刊第1号をお届けします。2000年の4月に京都芸大創立120周年特別号を発行して以来、暫くご無沙汰致しましたが、この度、改めて定期的に刊行することができるようになりました。

永年京都の風土に培われてきた本学は、どちらかと言えば、地味な性格で、今まで広報のための出版物もほとんどありませんでした。美術の日々研鑽を積んだ成果は、早春の京都市美術館で開かれる作品展で、また、音楽の日夜練習を重ねた結果は、年に3度の定期演奏会と学年末の卒業演奏会で、本学を支えていただいている京都の皆さまに精一杯の披露をして、観ていただき、聴いていただくことを何よりも大事に思って参りました。そしてこの思いは情報時代になっても全く変わりません。しかし成果だけを皆さまに観ていただいたり、聴いていただくだけではなく、京都芸大の日頃の授業や制作活動、練習風景なども、教員や学生の顔の見える形でお報せしようとこの『芸大通信』の発刊に踏みきました。

京都の文化力ということが、この頃、よく話題にのぼるようになりました。京都が文化の都として千年の伝統を継承し、さらに成熟させるとともに、常にその上に立った文化の創造への活力に満ち満ちているのは、この都の文化力の源泉が涸れることなく、それぞれの時代の歴史を通して混々と湧いていることによると思います。京都芸大も「本ある者は是の如し」と言える文化力の源泉の一つでありたいと思っています。これからも、何とぞよろしくお願い致します。

京都市立芸術大学 学長

西島 存則

音楽学部の歴史と教育



■音楽学部の歴史

京都市立芸術大学音楽学部は、1952年に京都市立音楽短期大学として創立されました。1969年に美術大学と統合して芸術大学音楽学部となり、1980年に現在の西京区大枚杵掛に移転しました。その後、1986年に大学院修士課程が、2003年に大学院博士（後期）課程が発足しました。2002年には学部にも音楽学専攻が設置され、学部63名、修士20名、博士5名および若干の外国からの研究留学生在が学んでいます。2002年には、創立50周年を迎えるに至りました。

■音楽学部の教育

音楽学部の教育は少数精鋭を基本としています。小人数の学生1人1人に対して行き届いた指導をするよう努めており、互いの顔が見える環境で、きめ細かい教育を行っています。海外との交流も盛んで、2000年には学生オーケストラのプラハ公演を行い、2002年には弦楽オーケストラのドイツ公演を行いました。また毎年、ドイツのブレーメンやフライブルグに、学生を短期留学させています。こうしたなかから、優れた国際感覚をもつ音楽家が育つよう、教員一同、熱心に教育にあたっています。本学音楽学部、音楽研究科を卒業した数多くの人材が、音楽界・教育界などで活躍しています。（柿沼敏江）

●新任教員紹介

四方恭子助教授〔ヴァイオリン〕が着任されました。

今年3月末で退官されたヴァイオリンの岸邊百雄教授の後任として、10月1日に四方恭子（しかたきょうこ）助教授が着任されました。四方先生は、ドイツ国立フライブルグ音楽大学ソリストコースを卒業され、1990年からケルン放送交響楽団第1コンサートマスターをされていました。またヨーロッパの多くの著名な交響楽団や日本ではNHK交響楽団や京都市交響楽団などとソリストとして共演されています。ドイツでの教職経験も豊富なので、今後の音楽学部の発展に大きく貢献して下さることでしょう。

京都芸大時代を振り返って

～野球に生き、舞台に生き～

阪 哲朗



阪 哲朗(哲朗 てつろう) 氏

京都市出身。京都市立芸術大学作曲専修にて、廣瀬量平氏らに師事。卒業後、ウィーン国立音楽大学指揮科にて、K.エステルライヒャー、L.ハーガー、湯浅勇治の各氏に師事。

1992年 スイス・ベルン州ビール市立歌劇場専属指揮者に就任

1994年 PMF音楽祭(フィック・ミュージック・フェスティバル)演奏会に出演、

1997年 ブランデンブルク歌劇場専属第一指揮者就任。

1998～1999年のシーズンより、ベルリン・コーミッシェ・オーバー専属指揮者に就任、

1995年 第44回ブザンソン国際指揮者コンクール優勝

1996年 京都府文化奨励賞

1997年 ABC国際音楽賞

2000年 京都市芸術新人賞

2000年 第2回ホテルオークラ音楽賞

1986年に、入試とともに初めて沓掛を訪れた時はここは京都だろうかと思うほど遠くに来た気がした。以後の4間は現在の自分に繋がる掛替えない時間だったと今更のように思う。京芸在籍時代はとにかく好きなことを好き放題やらせてもらったことしか覚えていない。

まず野球の話題。

高校時代には硬式野球部に所属していた。あの桑田・清原と同学年だ。当然だが甲子園出場、そして全国制覇の道は遠く厳しい。2年の単位選択で「芸術系」に進むことになり、また合唱部の「指揮者」に就任したものだから、両立は不可能になり、退部。背番号4つけた迷セカンドの僕は、結局1年も「勝ち」を経験できずに高校野球生活を終えることになった。

希望の京芸には入学できたが、高校3年の最後の夏まで野球を続けられなかったという思いがずっとあった。僕の高校は一応進学校で、加えて中学までの野球経験者が少なく、3年まで野球を続けられるかどうか、戦力のポイントになっていた。部員数も20を越えることはまずなく、9にぎりぎりに近い状態だった。100を超す某名門野球部との練習試合などは、目も当てられなかった。あてがわれた野球部更衣室には、「〇×先輩を見習え～」と書かれてあり、対戦前から威圧感がひしひしと感じられた。ちなみにその先輩とは、なんとベーブレードから三振を取った不世出の大投手だった。試合前練習では地鳴りのような響きの掛け声に浮き足立ち、試合でももちろん圧倒され続けた。

京芸入学後は美術学部生主体の準硬式野球部に籍を置き、ずっとピッチャーをした。声楽科の同級生とバッテリーを組んだが、2年もレッスンやなにやらで本当に忙しく、試合直前の練習と試合にしか登場しない「音楽バッテリー」といわれた。試合は主に四芸祭(京芸・京大・京大・愛知県芸、京都芸大のお祭り)などだが、1年生から主戦投手、3回の京都大会では西山グラウンドで3連投。連投の疲労でよれよれになりながらも優勝を果たした。教職員チームとの対戦も結構した。体育の早川先生、学食の岡本チーフ、ピオラの平田先生、その他普段あまり交流のない美術学部の先生方、みなさん野球仲間だった。早川先生には顔面のデッドボールを食らわせ(哲朗 なさいっ) 岡本チーフには渾身の120～130キロの内角ストレートを見事にレフトに痛打されたことなど昨日のことのように思い出される。

もともと僕の学年は15と男性の人数が多く、運動好きな人も結構多かった。日頃から体育の授業は皆勤、休み時間にキャッチボールをしたりして、故野澤先生の手塩に掛けた通称「野澤農園」にボールを飛び込ませ、お目玉を食らったことも一度や二度ではなかった。梅雨について行われる6の校内行事「ビール杯」(一ボール、ソフトボールの60～70チームからなる大トーナメント戦。優勝チームには最高の栄誉とビールが何ケースか頂ける)など常連で、定演が近くオケの授業など佳境をむかえる中、人数調達に走り回った。元来、ひ弱な音楽学部生にとって肉弾戦のバレーボールは所詮勝ち目がなかったが、ソフトボールでは存分に気を吐いた。このとき僕は所属の野球部ではなく音楽学部チームに入った。1年生のときは野球部チームに敗れ準優勝、2年生ではまた決勝戦で野球部と対戦、見事打ち破り優勝した。「音楽学部はすぐムキになるから…」と芸術学部の人たちに揶揄された。どこかのお祭りのように死者が出ることはなかったが、毎年必ず骨折などのけが人が出るほどの熱狂ぶりといえば、想像できよう。

現在も僕は複数の草野球チームに所属している。あのドカベンで有名な水島新司さん率いる「あぶ3やたけし軍団チームと同じリーグで神宮外苑の野球場で試合を楽しんでいる。最近は無沙汰だが、ベルリンでは、駐留米軍が創めた結構なレベルの硬式リーグがあり、兼任コーチとして10～20の若者達と本物のBaseballに興じている。滞日中は気分転換にバッティングセンターは欠かさず、行けば200前後の打ち込みをしている。

次にミュージカル。

1回生の時から先輩に引きずりこまれ「アニーよ銃を取れ」の稽古ピアニスト兼音楽アシスタントを務めた。僕の舞台モノ、初体験である。僕の代で7回くらい経っていたのだろうか、当時すでに洛西を中心に固定客を持つ秋の名物になっていたと思う。

ただ、その頃はまだ指揮系統がはっきりしておらず、アレンジを作曲科の学生に発注すること、譜面を管理しパート譜を作ること、そしてオーケストラを集め練習して本番へ、という流れが悪く、また責任者がいなかった。先輩の指揮者にもお願いをして振っていただくという状況で、双方どこかに遠慮があった。またピアノ稽古をよく知らない指揮者の常で、オケ合わせの段階でピアノ稽古とのテンポの違いなどもあり、何よりミュージカルを上演にこぎつけるまでの一体感に乏しかった。2回生の時に、僕は「稽古ピアニスト兼アシスタント」を卒業、音楽監督兼指揮者という要職につき音楽面の全責任を背負うことになった。まず楽譜を作る作業。ピアノのボーカルスコアよりオケ譜を作るアレンジを、作曲科の学生に分担した。また時には洪る先輩に、お願いして回り、先生にも管弦楽法の生きた授業教材ということで、公的にアレンジを認めていただくようお願いした。作曲家の書いた音が実際にオケで鳴る、もちろんアレンジではあるが、やはり貴重な経験だ。時には出ない音を書いて恥ずかしい思いもすることもあったかもしれないが、何事も勉強だろう。締め切り期限には余裕を持っておいたはずなのだが、そこは作曲家の常、なかなかアレンジ楽譜の回収が捗らず、苦労した。原稿編集者の苦労までもが何える一幕でもあった(原稿も遅れています…!)

とにかく仕事はいくらでもあった。夏ごろからはコピーが完備の学食が僕の職場となった。大きな机の上に楽譜と消しゴムのカスを散乱させ、どの授業に行くでもなくひたすらアレンジやパート譜作りをしていた。また携帯のない時代だったから、学食に居さえすれば誰彼となく会え、連絡を取ることができるのも好都合だった。

オケ練習の前にはメンバーの椅子や譜面台のセッティングなど仕事如山積みで、裏方さんなんて1回もないからひとつひとつ覚えていった。会場になる講堂にも足繁く通い、僕らの時からピットを開けるという当時としては冒険をやり出した。今思えば学生による不慣れな分厚いアレンジ、1回生を主体とした声量的に非力なキャスティングにも原因があり慢性的に歌とオケとのバランスの悪さには苦しめられていた。しかし、物置場と化していたピットを有効活用することによって、かなり解決できるのではと考えたのが見事当たった。以降はピット使用が当たり前になったと聞く。

このミュージカルで「ブリガドーン」「野郎共と女達 Guys and Dolls」を続けて指揮を取り、4回生の時にはミュージカルを後輩にバトンタッチ、上級生で喜歌劇「こうもり」に挑戦しようということになった。簡素な舞台ではあったが、オペレッタの団体から衣装や小道具は借り、男声コーラスの人数の少なさは美術学部生に応援を頼み、何でも手作りで夏ごろから準備した。故松田先生には台本作成から演出まで本当にお世話になった。歌に踊りにお芝居…の時から完璧にこの世界にはまった。2回の舞踏会のお客さまには、当時の学長、音楽学部長、美術学部長、事務長、学食のチーフとお歴々の方々をお呼びし、常森・蔵田両先生のソロにデュエットと豪華なプログラムだったことが想い出される。

公演は手前味噌だが大成功だったと思う。これがきっかけで卒業後はヨーロッパに渡って本場の「こうもり」を観よう、そして指揮しよう…と思い、幸運なことにその夢はかなえられた。

丁度だった今、文化庁移動芸術祭、東京二期会公演の「こうもり」最終公演を振り終え、新幹線の中で原稿を書いている。僕自身の最初の「こうもり」上演からもう14回の月日が経ったが、所変われど同じ「劇場」という独特の喧騒と静寂のコントラストが好きでピットでの仕事を続けている。そしてどうやらこれは麻薬のようなものだと思信しているのだが、どうすれば1回でも多くのお客様に、共演者に、この究極の感動を味わっていただくことが出来るだろうか、そしてもし許されるなら僕自身にも…これからも大いに精進したいと思う。

「脳のリセット」 ～美術学部と「総合基礎実技」授業～



課題の終了時には一人ひとりの作品に対し合評が行われる。

本学は、美術学部の前身である京都府画学校が1880年(明治13)に創立されて以来、120有余年の歴史を誇る日本最古の芸術大学です。その間、幾多の芸術家を輩出し、本学出身者の活躍する分野はますます広がりを見せてつあります。

美術学部の教育において、他大学にはないユニークなカリキュラムとして「総合基礎実技」授業があります。既に30年以上の実績があるこの授業の概要をご紹介します。

美術学部は現在4科・12専攻から構成され、そのカリキュラムは、実技と学科との2部に大別されます。そのうち実技カリキュラムは、各科・専攻別に行われる授業がほとんどですが、1回生の前期のみ、科・専攻の区別を超えた、全専攻共通かつ必修の授業が行われます。これが総合基礎実技です。つまり、新入生は全員、入学後の半年間、総合基礎実技の授業を受けなければならないのです。

このカリキュラムの目的は、入学前の受験勉強の段階で植え付けられた美術に対する既成概念をまず打ち砕いた上で、学生が各自所属の科・専攻の実技のみにとらわれて視野を限定されてしまうことのないように、美術表現の基本となるものを体験させ、さらには幅広い美術の世界に目を開かせる機会を新入生に与えることにあります。

授業の実施形態も独創的で、学生は所属の科に関係なく4クラスに混成され、教員も実技・学科にかかわらず専攻の枠を超えて全員が参加します。授業内容は、各年度ごとに設定される大きなテーマに沿って、学外研修、講義、制作指導、共同制作、講評・合評などを組み合わせており、ヴァリエーションに富むものとなっています。

この授業を契機に、所属の科・専攻にとらわれない分野に興味を持つ学生も多く、さらには、今までにない全く新しい概念・分野での芸術を生み出した卒業生も存在することが、総合基礎実技の重要性を示していると言えるでしょう。

現代社会において芸術の果たす役割はさらに大きくなり、芸術を通して人間存在の本質を見据えることが芸術大学の教育に要請されている状況にあります。美術学部でも、総合基礎実技を通して芸術の本質と可能性を追求する人材を育成すべく、今後も授業の内容・形態を改訂していく計画です。



(礪波恵昭)

総合基礎は他専攻の学生と知り合い、刺激を受ける貴重な期間。

「宇宙への芸術的アプローチ (AAS = Artistic Approaches to Space) 研究レポート

AAS参加メンバー(2003年10月現在)
 福嶋敬恭教授(彫刻)
 野村 仁教授(彫刻)
 松井紫朗講師(彫刻)
 中原浩大講師(彫刻)
 砥綿正之講師(構想設計)
 池上俊郎教授(環境デザイン)
 藤原隆男助教授(宇宙物理学)
 井上明彦助教授(造形計画)



点検中のスペースシャトルを見学するAAS一行。
ケネディ宇宙センター(2002年8月)



KOKORO PROJECT
(きぼう保管室における芸術実験の構想)003年

宇宙飛行士の向井千秋さんのモットーは「仕事場は宇宙」です。この言葉は、宇宙開発事業団(NASDA)との共同研究を通じて向井さんと親しくお話を交えるようになるまでは、宇宙空間を仕事場とする宇宙飛行士の誇らしい自覚を表すもの思っていました。

ちがうのです。地球そのものが宇宙にある以上、私たちのいる「ここ」がもうすでに宇宙であり、この特殊な生命の星のかけがえのなさをたえず心して仕事しようという、万人への呼びかけなのです。そのことに気がついて、あらためて今ここが宇宙であることを強く意識してみると、眼前の日常風景もちがって見えてきます。

私たちとNASDAの共同研究は2001年度から3年間の予定で始まりました。これは、現在建設中の国際宇宙ステーション(ISS)における日本の実験モジュール「きぼう」の利用方法を考えるにあたって、従来のような自然科学・工学分野だけでなく、芸術を含めた人文・社会科学分野での可能性を探ろうということで、1996年に始まった「宇宙環境の人文社会的利用の研究」が母体になっています。当初は、NASDAが国際高等研究所に研究委託したもので、それを受けて当時の上山春平学長が学内に参画を呼びかけられ、専攻の枠を越えて美術学部からだけでなく音楽学部からも有志が集まり、20名近くで研究がスタートしました。

しかし一般の学術研究とちがって芸術は具体的な創作実践が必要なため、私たちの提案によって他の人文系研究とは分離し、NASDAとの直接的な共同研究というかたちに転換しました。外部機関との共同研究は本学にとって初めての冒険でしたが、NASDAにとっても前代未聞の研究分野です。芸術分野でこの研究に参加したのは、本学と東京藝術大学だけでした。

芸術は太古から地上の重力と光のもとで人間の宇宙観と深く関わってきました。この共同研究が対象としているのは、宇宙のイメージといった観念的なものではなく、地上から高度400kmを周回する微小重力と閉鎖環境に規定された宇宙飛行士たちの具体的な活動空間です。私たちは、アメリカのNASAを含めた宇宙開発の現場や宇宙飛行士の方々とじかに接するなかで、この宇宙環境の条件をふまえた芸術活動の意義や可能性を考え、さまざまな実験や提案を行なっています。

MUSE計画と名づけたこの実践的研究は、宇宙に滞在する宇宙飛行士の精神生活に寄与することだけでなく、宇宙と地球の超越的な光景を前に、芸術と文明を生命活動の根底から問い直すことにもつながっています。これは本学の歴史ある芸術研究と教育にふさわしい課題ともいえます。(井上明彦)

日伊世界遺産研究会



第3回日伊国際シンポジウム参加メンバー
*カッコ内は専門領域

上村淳之副学長(日本画)
山添耕治名誉教授(油画)
木村法光教授(総合芸術学)
龍村あや子教授(音楽学)
吉川周平教授(日本民族音楽・舞踊学)
栗本夏樹講師(漆工)
滝口洋子講師(ビジュアルデザイン)
山内 章非常勤講師(造形計画)
玉村奈緒子国際交流アドバイザー(国際交流)

1998年11月、京都で開催されたユネスコの世界文化遺産会議に前回の議長を務められたシエナ大学副学長フランチェスコ・フランチョーニ氏が来日された際、当時のユネスコ日本代表部参事官の成宮氏のご案内で本学を来訪され、西島学長と共にお目にかかりました。

このとき、「世界文化遺産の保存・修復について懇談をしたい」との申し入れを受けました。両国の文化を「石の文化、木の文化」と表現され、歴史的文化都市としての共通の基盤を持つと共に、異文化である事を端的に実感し得る伝統的な文化環境にある両市、そしてそこに在る両大学間での研究を提唱され、熱意を持って合意した事に始まります。

大学内に「日伊世界遺産研究会」を立ち上げ、1999年11月シエナ大学に本学から13名の発表者とスタッフが訪問、各専門分野の研究を発表し、シエナ大学からも同様の発表者の参加を得て開催されました。その報告会は翌年4月京都アスニーにおいて連続講演の形で開かれ、多くの市民の参加を得て好評裡に終了しました。

第2回目は2001年「文化遺産の伝承と現在」をテーマに11月、国立京都国際会館にて開催、シエナ大学側から7名の発表者を迎え、シンポジウムとラウンドテーブルにおける意見の交換など、市民の参加を得て盛大に行われました。

今回は第3回の開催となり、シエナ大学にて行われましたが、当地では講演者として大学外からの参加もあり、音楽、演劇の分野に及ぶ事となりました。

「石の文化、木の文化」と両国の文化の表現に始まるこの研究は単に美術に関することにとどまらず、広範な学問領域にわたる研究が必要であります。

今後は関係機関とも協議し、両国が両輪となってこの研究、運動を進めていきたいと思っています。皆様方の積極的なご参加を得て実りあるものに成長させたいと思っています。

京都市立芸術大学 副学長

上村淳之